

特別寄稿 「サイ」と「ワニ」

十五回生 伊藤 發子

(山崎) 在福岡

「サイ」と「ワニ」と申しましても、動物の話ではございません。千里山にゆかりのある「佐井」と「和仁」のことです。ります。

古事記中巻 神武天皇の段に

佐草賀波用 久毛多知和多里 宇泥備夜麻 許能

波佐夜芸奴 加是布加牟登須

訓み||狭井河よ 雲立ちわたり 畝火山 木の葉

騒ぎぬ 風吹かんとす

解釈||狭井河から雲が湧き出ている 畝火(畝傍)山

の木の葉が騒いでいる 風が吹こうとしている

という歌が記されている。この歌は一見平凡な叙景歌のようであるが、地名二つも読み込まれ、ただならぬ雰囲気がある。しかし私は、この有名な歌を深く考えようともしてこなかった。

しかし、三、四年前、何十年ぶりかで千里第二小学校十五回生男女合同の同窓会に出席し、感慨に浸っていた時、名簿を見て驚いた。

「和仁高明」さん。

エーッ「ワニ」さんが、なして(博多弁で「どうして」の意味)千里山におらつしやると?

昔は男女別クラスであり、同窓会も月組(女子クラス)

だけでしていたため、「和仁」さんの存在を知らなかったのである。

その途端に、冒頭の不思議な歌が頭をよぎり、次のような単語が連想的に浮かび上がった。

ワニ↓王仁・和邇吉師↓狭井河↓佐井寺↓佐井神社

そこで久しぶりに古事記・日本書紀をひもといてみると記(以下古事記を「記」、日本書紀を「紀」と略記する)には、およそ次のように書かれている。

神武天皇の「皇后選定」の段。

美和の大物主神(ミワノオオモノヌシノカミ)が勢夜陀多良比賣(セヤダタラヒメ)を見染めて生ませたのが、富登多多良伊須岐比賣(ホトタタライススキヒメ)の命である。このひめの名をヒメタタライスケヨリヒメともいう。このイスケヨリヒメを神武天皇が高佐士野(タカサ

シノで見染めて一夜を過した。このヒメの家は「狭井河の上に在りき」という。そしてその「狭井河」の註に「其の河を佐韋河と謂う由は、其の河の辺に山由理草多に在りき。故、其の山由理草の名を取りて、佐韋河と号けき。」とある。

即ち「サイ」とは百合の花のことである。イスケヨリヒメはきつと百合の花のように美しかったのでしよう。

現在、奈良の大三輪神社の奥に佐井神社があり、大きな石塔に「佐井神社」と彫られている。その前の道を左に行けば、古代史にしばしば登場する「山の辺の道」である。そういえば同級生に山辺さよ子さんがいらつしやつた。大和の佐井神社と千里山の佐井寺と何か関連があるのだろうか。

記には冒頭の歌の由来について、以下のように説明している。

神武天皇に見染められた「狭韋河」のほとりのイスケヨリヒメは、後の一人として宮中に召され、三人の皇子を産み奉った。彼女は神武天皇崩御の後、天皇の庶兄、当芸志美美(タギシミミ)の命の妻となった。

(美人はトクですねえ。家康の母方の祖母大河内氏の

女お万の方は美人の誉れ高く、水野家に嫁して家康の母お大の方を生み、その後家康の父方の祖父清康の後妻となり、清康が25才で没すると、次々と武將に嫁ぎ、計五回、一応立派な武將五人の妻となった。

しかしこのタギシミミの命は継子である三皇子を殺そうと計画した。それを知った母親イスケヨリヒメは、我が子たちに急を知らせた。それがこの歌である。それをどういう手段で伝えたかは不明であるが、腹心の者に韻文で伝えたのであろう。韻文の方が覚えやすい。和歌とは元来、意思伝達の手段でもあった。本居宣長は「和歌を「和ふる歌」と訓んでいる。

結局三皇子の中で最も勇敢であった第二皇子神八井耳(カムヤイミミ)の命が、タギシミミの命を討ち、第二代緩靖天皇となった。(別の説もあり。)

次いで佐井寺についての文献には、次のようなものが挙げられる。

(一) 寧楽遺文の一つ。

僧道葉銀板墓誌(大和天理市岩屋町五二四ノ三 出土)

表||「佐井寺僧道葉 族姓大櫛君 素上奈之孫」

裏||「和銅七年歲次甲寅二月廿六日命過」

(筆者註 これについては千里山佐井寺図書館蔵『吹田市佐井寺 風土記』「ぼれ話」(藤井久義著1964)に詳しい説明があるので、この稿の末尾に掲載する。)

即ち和銅七年(724)には、「佐井寺」の名称があり、僧の名からして医薬に効験ある寺として評価されていたのかも知れない。

また「群書類従」巻第十八「神祇」の部に「狭井神社」の項目があり、以下のように記されている。

狭井神社。在大和國城上郡。

伝聞。狭井神者。大己貴命之荒魂大國魂神。即当社別社也。

日本書紀曰。倭大神著二穗積臣一。云云。命二大倭直祖長尾市宿弥一令祭矣。所謂大市長岡岬。今狭井社是也。(中略)

狭井神。大己貴命荒魂大國魂命。(中略) 伝聞。狭井神之子。事代主神。(以下略)

よく判らないけれど、「狭井神」、「狭井神社」は大國主命とその御子事代主神とに關係があり、「荒ぶる魂」であり、「大和国城上郡狭井坐大神荒魂社五社」とある。即ち「狭井」と関連のある神社は五社ある。

そんな難しいことは考えないことにして、問題は千里山の佐井寺と「狭井神社」と何か関係があるのだろうか。次に大阪へ行った時には、学殖豊かな現在の佐井寺のご住職様にご教示願いたいと念願している。

(二) 角川「日本地名大辞典」(昭58・10)

「佐井寺」の項目には大略以下のようにある。

吹田市佐井寺にある寺。単立(真言宗)。山号は碓井山。

山田寺の通称で知られる。本尊は山田大臣(筆者註 実名はよく判りません。しかし佐井寺の地に「山田」の地名が残っています)を大檀那として天平七年(736)行基により創建され、坊社60を数えた。寺名の由来は濁水時に霊

水を得て「佐井の清水」と言われたことに拠る。弘仁二年(812)には52代嵯峨天皇が当寺に綿100屯寄進され、朝廷が命じる恒例の読経を行なう21ヶ寺の一つであった。即ち、延暦寺、清水寺と肩を並べる寺であったが、戦国期の

天正年間(信長の死は天正10)に兵火にかかって伽藍を焼失。近世正保四年(1698)京都所司代板倉周防守重宗の助力によつて堂宇復興。その時鑄造された梵鐘は、同寺に現存する。(筆者註「100屯」は多すぎるが、原文通りにした。)

へーッ　びつくりした！　佐井寺さんはそんなにすごいお寺だったんだ。それならば佐井寺の地も重要な場所だったに違いない。でも大和の狭井神社とどのような関係にあるのか、ご存じの方はご教示下さい。

でも「佐井(狭井)」が百合の花の意味であるのは嬉しい。駅を挟んで反対の丘陵地千里山は開發される前は桃の名所だった由。私たちの育った地に、百合と桃が咲き乱れていたなんて、本当に素敵。

次なる疑問は「ワニ」さんである。紀では「王仁」、記では「和邇」、その他「和珥」「丸邇」「鰐」「和仁」の表記もある。とにかく「ワニ」さんは四、五世紀ごろ、日本に文字を伝え、教え、日本の文化の向上につとめられた第一人者である。記、紀には大略次のように記されている。

神功皇后の皇子15代応神天皇(推定四、五世紀)の十五年目(まだ年号がない)に、百済の肖古王が日本に阿直岐(紀)、(記では阿知吉師)を使者として日本に良馬二頭を贈った。

当時朝鮮半島は北部の高句麗、南半分の東側が新羅、西側が百済で、二者が相争っていた。百済は日本に援軍

また、同時に漢文理解のために考えたのが、送りがな、返り点である。もし明治時代に、英語に送りがな、返り点をつけてくれたら、私達はどんなに助かったことだろうか。

I go to school、という具合に。古代の日本人は、すごいアイデアマン達であった。

また千字文とは何かというと、日本での五十音図に例えられようか。でも規模がけた違いである。漢字の四文字一組が50組あるので「千字」である。それが一字も重複せず、天地創造のお話になっている。

冒頭は「天地玄黄　日月盈昃　寒来暑往」、
卷末は「焉啄乎也」である。

来日したワニさんは、とりあえず皇太子菟道稚郎(ウジノワキノイラツコ)の「師」になったが、皇太子は忽ち「通り達らずといふこと莫し」となる。そこから日本人の文字学習が始まった。文字に関する系統は二系統あり、それぞれ「史」の称号を与えられる。

ワニ氏については現在、千里山佐井寺図書館蔵の『佐井寺観音繁盛記』中の「武家家伝」によると

「王仁　五世紀百済より渡来。論語・千字文を伝える

を求め、日本の方は百済の高い文化と技術を期待していた。しかし結局、百済は、新羅と唐の連合軍にはさみ撃ちされ、663年に滅亡。日本は38代天智天皇の代で、40艘の船団を組んで救援に赴くが、白村江で全滅。その後日本は遠の朝廷として太宰府を設置し、水城その他を築いて、唐の襲来に備えた。

それはそうと、とにかく百済の使者アチキは「能く経典を読み」と。そこで応神天皇は日本から二人の使者を肖古王の許に送り、文字を教えてくれる人の来日を依頼した。当時の航海は命がけなのに、よぐぞ来て下さったと感謝にたえない。なぜならこの時に渡来した漢字なしでは、日本の文化は考えられないからである。

尤も漢字だけでは、日本本来の言語表現ができなかった。そこで発明されたのが仮名である。「仮名」とは仮の字の意味である。「名」には文字という意味があり、室町時代には漢字のことを真名(本当の字)と言っていた。そして漢字の音(訓み)を利用して、一字一音の表音文字を発明した。漢字の一部をとったのは片仮名、全体を崩したのは平仮名である。勿論ワニさん渡来以前にも日本に文字が、伝わっていたが、積極的に学んでいなかった。

(儒教・千字文を伝える)　西文氏の祖

とあり、更に「阿知使主　五世紀応神天皇のとき渡来。文筆に秀れ、史部を管理。東漢氏の祖」とある。(一説には21代雄略天皇の代に渡来した、とある)。

東漢氏の名称の「漢」は中国の意ではなく、朝鮮加耶地方の小国安耶による。

まず、なぜワニの表記が「王仁」、「和邇」というように何種類もあるかという点、中国の漢字の訓みは時代によって異なる。例えば漢音と呉音のように。(「行」もコウ、ギョウ、アンと各種の訓みがある)

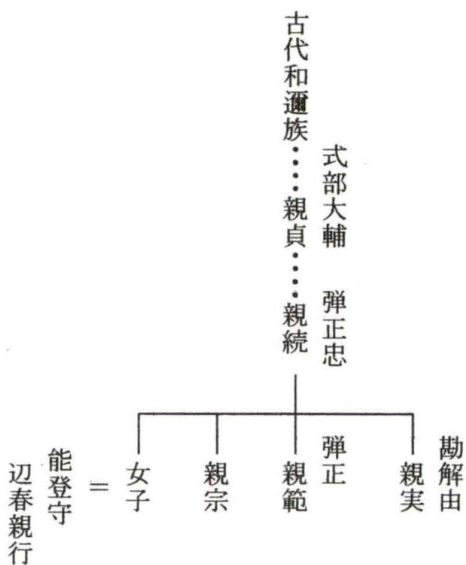
現在私達の苗字のよみは日本書紀を踏襲している。例えば六世紀ごろの刀剣(埼玉稲荷山古墳出土)では「多沙鬼」が記では「沙沙貴」、紀では「佐々木」。同刀剣では「加沙披余」が紀では「笠原」となる。

では千里山の「和仁」さんはどうか。前掲の「武家家伝」には概略次のように書かれている。

和仁氏　古代和邇族の末裔。不詳。ご存じの方はご教示下さい。

和邇・和珥・鰐なども記されるが、肥後の国のワニ氏

は和仁の表記をとっている。大和の国添上郡南部にいまも地名がある和邇が本拠であった。(筆者註現在も「和邇下神社」がある)。熊本県における最古の氏族は阿蘇氏と和仁氏であった。(中略)
 秀吉の九州征伐のあと、和仁氏は肥後一揆に加担し、城主和仁勘解由親実、弾正親範、親宗の三兄弟は田中城に籠ったが、小早川隆景その他に攻められ、落城(昭和61年以降発掘中)。和仁氏以後衰退す。とある。参考系図は以下のようなものである。



そして驚いたことに、概略次のような附記がある。
 図(一) 和仁



和仁は太玉尊(ふとだまのみこと)の化身といわれる。太玉尊は瓊瓊杵尊(にぎのみこと)に従って高天原より降臨した5人の神のひとつで、天岩屋戸の前で天照大御神の出現を祈った神でもある。



和仁は渡御の道中、時に王仁の代わりに舞い、また見物人に道を開けてもらったりと、王仁の補助的役割を担っている。

元来ワニさんは、天孫降臨の際、天児屋根の命とともに、三ギの命に従って、この地に來られた太玉の命の子孫である。それは良いとして、上掲の記述では「王仁」と「和仁」は別人であり、和仁は王仁の家来筋、或いは同族の分家筋であるらしい。

さらに、「武家家伝―和仁氏によると、『和仁軍談』という書物があり、それには田中城落城の有様が記されているという。敗因は一族の女婿能登守辺春親行の裏切りによる。和仁三兄弟の三男親宗は「身の丈七尺六寸もあ

る大男」で、その風貌から「人鬼」と呼ばれた。田中城あとは、熊本県指定史跡公園になっており和仁三兄弟の石像が立っている。

和仁氏は滅亡したと思われていたが、もう一人兄弟がいて生きのび、統実と称し、立花氏に仕えた。「和仁氏では都合が悪い」ので、「小野和泉守の養弟となり、小野久右衛門と名を改めた」。(参考文献『戦国大名城郭事典』日本の名族12棟)。

それにしても、何だっってワニさんは寧楽の地から、はるばる肥後の國に來て、又摂津へ戻ったのであろうか。もしかしたら、12代景行天皇の筑紫征伐、日本武尊の熊襲征伐に同行したのかも。しかし、記・紀ともにお二方の従者の中に「ワニ」さんの記述はない。でもこれは当たり前なのだ。王仁さんの渡來は景行天皇よりずっと後、15代応神天皇の時のからだ。

又現在阿蘇一の宮の宮司、阿蘇保夫氏の著書『阿蘇社と大宮司』(平成11年3月)にも、ワニ氏のごとは全く触れられていない。古代の名門ワニ氏があとかたもなく滅亡しているとは考えられないので、千里山の和仁氏は、阿蘇家と肩を並べる名門の末裔と思いたい。因みに阿蘇家は日本神道の中では重きをなし、明治以降は男爵として貴族に

列している。

また私は、和仁氏の衰退の原因の一つは、奈良時代以降天皇の生母を出さなかったことにも拠ると考えている。しかし記によると、応神天皇の皇太子ウジノワキノイラツコの生母はワニ氏丸邇之比布礼能意富美(ワニノヒフレノオオミ)の女(ミヤヌシカワエヒメ)である。また24代仁賢、25代武烈、29代欽明天皇の生母もワニ氏である。

しかしこのお人好しの皇太子は、弟で第四皇子のオオサザキ(次の16代仁徳天皇)の計略にひっかかって、天皇になり損なった。仁徳天皇は徳の高い天皇だと私達は習ったが、実は兄二人を謀殺したエゲツない天皇なのだ。ここではワニは「丸邇」となっている。

もしウジノワキノイラツコが、第十六代の天皇になつていればワニ一族は後世に家名を挙げたのかも知れない。例えば葛城氏(仁徳天皇の皇后磐媛の実家)や、后妃を多数輩出した蘇我氏のように。ただし、結局葛城氏も蘇我氏も、天皇家と藤原氏の連合勢力の前に、滅亡せざるを得なかったのだから、ま、いいか。

それにもう一つ驚いたことがある。同窓会で同席した和仁高明さんの話では、「今、古い家をこわして改築中である」とおっしゃる。「その古い家は何時頃建

てられたのですか」とお尋ねすると、「元禄時代」と涼しい顔でおっしゃる。エーツ。そして和仁家は江戸時代以来、この地の庄屋をつとめてこられた由。古文書に「当村庄屋和仁治右衛尉尉政□」とある。□の字は不明。そして、庄屋として、定期的に「淀の殿様」に報告書を提出していた由。「どういう内容でした?」「この地にキリシタンはいませんかというのが決まり文句だった」。エーツ、千里山とキリシタン?」

千里山に隣接する高槻にはキリシタン大名として有名な高山右近がおり、大阪冬の陣(1614)のあとマニラに追放され、彼の地で没した。

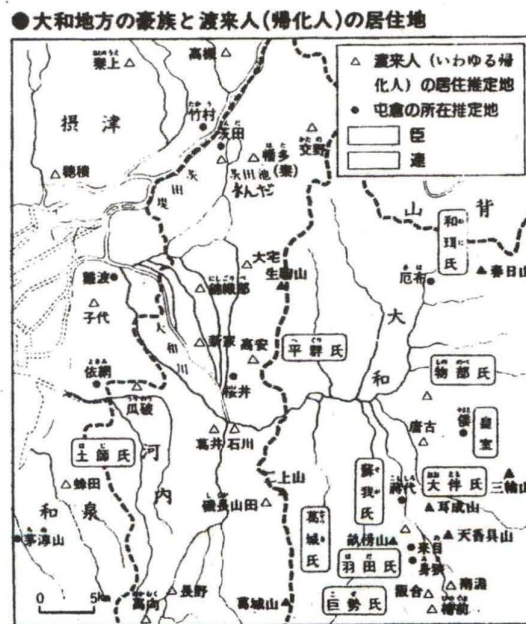
もしかしたら佐井寺、千里山はキリシタンの潜伏地としてにらまれていたのかもしれない。

又、「淀の殿様」とは何藩何氏なのか。淀藩というのはなく、京、大坂の交通の要衝「淀」の地を管理していたのは臼杵藩五万石の稲葉氏である。稲葉氏は春日局の実家である。

とにかく「サイ」寺と「ワニ」氏のことを調べれば調べるほど、疑問が湧いてくる。摂津国の歴史はむづかしい。以上のことについて、ご意見、ご存じのある方、どうぞご教示下さい。

因みに、五・六世紀頃の有力氏族の勢力地図を載せておきます。地図(二)の和珥氏は和仁・和邇・王仁・丸邇氏のこと、□で囲っているのが、当時の有力氏族である。ワニ氏は案外高槻・摂津に近いですね。(三輪山に隣接するのが佐井神社)

地図(二) 豪族と渡来人(帰化人)の居住地 6世紀ごろ



地図(三) 任那・百済の衰退(6世紀)



512	任那 4 県を百済に割譲
513	百済から五経博士来朝
538	百済聖明王、仏像・経典を伝える (一説552)
562	任那日本府滅亡
577	百済から造仏工・寺工ら渡来
602	百済僧観助、唐本を献上
610	高句麗僧曇首、紙墨を伝える

次いで渡来人について一言。

六世紀、七世紀は、日本では大和政権の確立期で、記(12)・紀(720)の歴史編纂も行われた。朝鮮半島では、それまでの中国支配(楽浪郡・帯方郡)に代わって、高句麗・百済・新羅が起り、互いに闘争をくり返した。中国では六朝時代の戦乱期を経て、隋(589~617)・唐(618~907)となり、過渡期の動乱期であった。そのため、日本(倭)に渡来、逃亡してくる文化人や技術者が多かった。稲作・製鉄などは、こうして日本にも拡がった。

特に朝鮮半島からもたらされた文化は多く、先述の

「王仁」「阿知使主」による文字伝来の他に以下の分野が挙げられる。

- ①「易・曆・医博士など」 六世紀欽明天皇の時代。
- ②「司馬達等」(522) 中国より渡来し、仏教をひろめる。鞍作の祖
- ③「観勒」(602) 百済より渡来。曆本を伝える。
- ④「曇徴」(610) 高句麗より渡来。絵の具・紙・墨などを伝える。
- ⑤「味摩之」(612) 百済より渡来。伎楽の舞を伝える。
- ⑥「弓月君」五世紀応神天皇の時渡来。養蚕・機織を伝える。秦氏の祖

(佐井寺に関する資料)

(前掲『吹田市佐井寺風土記』(ぼれ話による))

「銀板の墓誌銘」―出土品の発見者

大和・榊原氏宅訪問記 (和仁儀一氏口述)

昭和三十五年三月十日付け、大阪毎日新聞に、大和国天理市岩屋在榊原獅(たかし)氏所有の山地(藪)から、「佐井寺僧道葉師の骨壺」と、その中に収められてあった「銀板の墓誌銘」が発見されたことは、全国学会でも珍しい出土品である。と宣伝されていることを、四月中旬の

丑(牛)の祈禱の日に、山田寺住職谷光倫氏より、その旨語られたので、五月麦秋の頃何心なく訪ねたい気持ちで起こり、腰弁で九時頃に我が家を出立、近鉄に乗り天理駅に下車して、先ず天理教本社殿を礼拝した。(中略)

ある日、当若主人が藪を掘り返して居ったところ、石に当たったので、其の石蓋を取り除くと、方形の石で囲まれてあり、その中の小石を取り除くと、素焼きの骨壺が見つかり、驚いて家に帰り父に告げると、半信半疑の態たらく、誰かの墓地ではないか、等々思い乍ら現場へ戻り、恐る恐る蓋を開けると光るものがあり、それを拾い上げてみると、銀板一葉の裏と表に、毛彫りした墓誌銘であった。この地方では「その様なものが出ると、家に不祥事が起こる……」との云い伝えがあるため、元の通りに収めて内密にしておいた。

ところがふとしたところから漏れて、人から人へと伝わり、他所からの道具屋さんが見え、ごく内密で譲り受けたい旨、執拗に食い下がられ、「当方も災いの種を無くする為にも……」とつい釣り込まれて、手放す気持ちが湧いて、一度は手放したものでない。

やや時を経て、県の古文財保存委員会?の、人達の知るところとなったことを、古道具屋さんが逸早く耳にし、

行された僧か、それとも名僧で当寺へ招かれ、一山の僧の指導的役割を、果たしておられたのではなからうか。この墓誌銘のお蔭で今迄曖昧模糊とした觀念から拭い去られ、覺を並べて威容を誇っていたことが窺われる。

当時の新聞(毎日)に依ると、和銅七年(七一四)は奈良遷都後五年目、発見の年から数えて一千二百四十五年前である。此の様に葬者の墓に、姓名、生前の略歴等を刻んだ墓誌は、銅板、金銅板、銅壺、瓦等に刻んだものが、全国で十四例出されているが、銀製のものはこれが初めてで、しかも文中の「佐井寺」は奈良時代の寺院名には出て来ず、「大櫛」の姓も姓氏録にもなく、史料上からも大きな研究課題とされ、考古学界からも注目されている。云々

(筆者註 墓誌銘は本稿の始めの寧楽遺文に記す。同じころ、河内のみかん畠から記の編者太安万侶の遺骨と墓誌銘が出土した)

〈追加〉① 肥後の和仁氏に就いて

前述の、国指定史跡和仁氏田中城(和仁城ともいふ)について、熊本県に問い合わせたところ、玉名郡和水町

榊原氏の許へ返還に来たので、この重大性を察知し、早速と元のところに収蔵した。これで噂の三国人の手にも渡らずに済んだことは、何よりの俸せであった。(中略)

「出土品は只今東京へ運ばれ、学者仲間の研究資料となっており、(中略)」

「実は先日来県下一円に、”佐”の字のついている四十数ヶ所の地名を訪ね歩いたが、何一つ確証を得ることが出来ず、ガツカリして居る時に誰云うとなしに、「佐井寺の廃寺は河内方面にある……」との噂を耳にしましたが、それが摂津にありましたか……」と半信半疑の様子に見受けられたが、私の持参した、佐井寺観音由来書と同村史とを見るに及んで漸う納得されたく(以上和仁氏口述)この墓誌銘と骨壺は目下奈良国立博物館に陳列されており、過日、山田寺の谷光倫住職が訪れ、骨壺の前で懇ろな回向をされた。

私も今迄は、行基開祖の由緒ある古い寺であることは判っていた。また伝説と事実と、半々にしか信じて居なかったが、墓誌銘と骨壺の出土により、千二百年五十年前の和銅年間に、たとえ草堂の類であったとしても、六十余坊も存在して居ったことには間違いはないらしく思われる。墓誌銘の道薬師は、当佐井寺で修

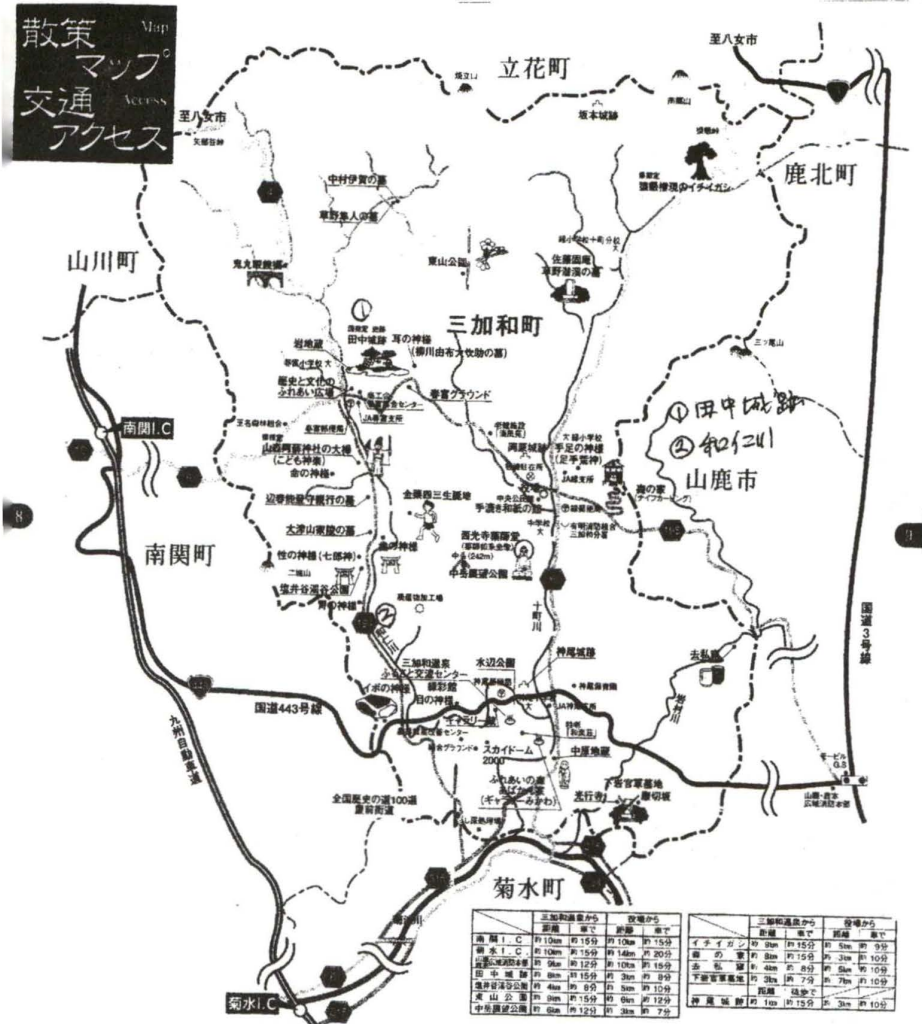
三加和総合支所から、バンフレット他資料をいろいろ送っていただいた。係りの方が「エッ大阪にもワニさんがいらつしゃるのですか」とおっしゃったので、こちらがびっくりした。

和水町は、熊本県北、福岡県に隣接する地で、もと参勤交代の豊前街道が通り、現在も北九州自動車道、国道三号線に挟まれ、阿蘇中岳が中央にあり、菊池川に繋がる三本の川(岩村川・十町川・和仁川)とその支流が網の目に流れ、阿蘇の名水・湧水の地、豊かな交通の要衝で、庶民の力も強かった。

秀吉は全国平定の最大の課題である九州征伐のため、自ら大軍を率いて島津を降伏させ、次いで宿敵佐々成政を失脚させるため、故意に「難治の国」肥後一国を与え、一揆が起ると成政を責任者として切腹させた(天正十六 1588)。

和仁氏は肥後一揆に加担し、田中城に農民・国衆とともに籠もつて一ヶ月持ちこたえたが、安国寺恵瓊の調略に乗った女婿辺春親行の裏切りにより、城に放火され、落城全滅した。この乱で五七〇〇人討死。加藤清正は千人の首を集め、その中、百を秀吉に送った。その後肥後は加藤清正、小西行長、相良長毎が三分割領有し、秀吉は刀狩り令を出し、四年後、朝鮮に出兵(1592)、七年も続け

地図(四) 三加和町周辺



た。肥後一揆で討ち死にした甲斐守宗立は、臨終に当たって介抱してくれた人に「自分は死後に霊となり、障害に苦しむ人を助けよう」と遺言した。宗立の遺志に依り八つの神が肥後各所に祀られている(足手・命・目・歯・耳・胃・イボ・性の各神)。性の神は「夫婦和合、子孫繁栄」に効験があるとかで、何百年間絶えることなく信仰されている。

新しく得た資料によると、和仁氏は6代孝安天皇の裔で戦国期には玉名郡和仁村・高地村・十町村・筑紫国白木村を領有し、第十代足利將軍義植に従って上京したこともある(1365年、1508年の古文書に依る)。

この和仁氏の無念の滅亡をいたみ、肥後の人は、毎年二月の第二日曜に、田中城公園で「戦国肥後国衆祭り」を行なっている。また、映画「おんな国衆一揆」(三池崇史監督)では、和仁氏が取り上げられている。この映画で使われた和仁氏の家紋は鶴の丸である。

〔追加〕② 和珥氏の始祖に就いて
日本書紀卷第四 5代孝昭天皇

観松彦香殖稻天皇(ミマツヒコカエシネノスメラミコト)は世襲足媛を立てて皇后とす。(中略)古事記

では大倭帯日子国押人(オオヤマトラシヒコクニオシビト)の命である。

この孝昭天皇は「日本足彦国押人尊(ヤマトラシヒコクニオシビトノミコト)を立てて皇太子としたまふ。年二十。此れ和珥臣(ワニノオミ)等が始祖なり。」とある。即ち孝昭天皇の第二皇子日本足彦国押人命が、次の6代孝安天皇となり和珥氏の始祖であるといわれる。

〔追加〕③ 岡県主熊罥氏に就いて
日本書紀卷第八 14代仲哀天皇

仲哀天皇が西征のため周芳の国(山口県)に至った時、岡(福岡県遠賀郡)の県主熊罥が天皇を迎えて恭順の意を表わした。

伊藤發子氏の略歴

大阪府立桜塚高校(入学時は府立豊中高女)卒。
お茶の水女子大学国文科卒。東京都立大学大学院
国文科修士課程・博士課程修了。

〔福岡〕中村学園大学教授。平成六年退職。
著書「原典による文学概論」(権歌書房1994)他。